

急性脳卒中への予防的抗菌薬投与に効果認められず

急性脳卒中においては感染症を発症することが多く、これが予後不良につながることが多い。本研究では、第3世代のセファロスポリン、セフトリアキソンを用いた予防的抗菌薬投与によって急性脳卒中患者の機能的転帰が改善できるかを検討した。

2010年7月～2014年3月にかけて、オランダの30か所の医療機関において急性脳卒中患者2,550例を対象とし、多施設共同非盲検ランダム化比較試験を実施した。通常の脳卒中治療に加え、セフトリアキソン2gを24時間ごとに4日間静脈内投与する群と、通常の脳卒中治療のみの群にランダムに割り付けた。割り付けは、発症後24時間以内に行われた。ランダム化直後に12例が除外となり、結果として2,538例が分析対象となった（セフトリアキソン群1,268例、対照群1,270例）。3ヶ月の追跡期間を完了したのは2,514例であった（99%、各群ともに1,257例）。3ヶ月後の修正Rankinスケールは両群に差はなく、セフトリアキシソンの予防的投与による機能改善は認められなかった（オッズ比：0.95、 $p=0.46$ ）。また、セフトリアキシソンの予防的投与による有害事象は認められなかったが、クロストリジウム・ディフィシル菌の過剰繁殖感染がセフトリアキソン群にのみ2例（1%未満）みられた。

したがって、急性脳卒中の患者に対し予防的にセフトリアキソンを投与しても、3ヶ月後の機能改善は改善されないことが示された。今回の結果は、急性脳卒中患者への予防的抗菌薬投与を支持しないものであった。

出典：The Lancet. Published online Jan 19, 2015; pii: S0140-6736(14)62456-9